

「雨月物語」論

——「怪異性」を通してみられる秋成の世界——

佐 伯 公 子

序

「雨月物語」といえば私たちはただちに怪談小説だと思ふ。そして、その作者上田秋成といえ、大半の人がまず「雨月物語」を想起するであらう。

事実、「雨月物語」は上田秋成の數ある作品の中の代表者であり、また怪談小説としても特異な存在を示しているのである。

しかし、この怪異小説「雨月物語」をみるに當つて、單なる怪談小説としてかたづけられてよいものであらうか。「雨月物語」の怪異性をまったく否定するつもりではないけれども、「雨月物語」に怪談小説というレッテルを貼りつける前に、はたしてその怪談小説というのが妥当であるのかどうか。怪談小説だとキツパリいきつてよいものであらうかと思つた。

私には「雨月物語」の全篇を通してみられるところの「怪異性」の底に、「雨月物語」の全体があり、そこにこの「雨月物語」の作者である上田秋成の赤裸々な姿が秘められているように思われるのである。

「雨月物語」においては「怪異性」がすべてを物語っていると思

われてならない。したがつて、その「怪異性」を眺めて、この問題を説明してゆきたいと思ふ。

本 論

「雨月物語」は九つの短篇から成り立っており、そのすべての篇に、超現実の世界に関する説話が典拠として選ばとられて、怪異の出現がみられる。

さて九篇中には種々様々な怪異の描写がある。しかしそのすべてにおいて、怪異性は「雨月物語」を特徴づけるものであつて、それを代表するものであると思われる。しかし、怪異性はあくまで「雨月物語」を特徴づけるものであつて、「怪異の現われ」そのものがこの「雨月物語」を形作つていのではないと思えるのである。それぞれの篇には作者秋成の投影の色濃いものがある。

だからといって、「雨月物語」の怪異性を否定するののかといえは決してそうではない。怪異性は「雨月物語」の表面に強く現われ出でた特徴であつて、作者の考えなりを強調する手段であつたのであると考へられないであらうか。

これについて山口剛氏は「秋成は信を守るの筋を徹せさせるため

に幽霊を出現させた。これは筋の運びがおのづからさうさせたものとも考へられる。」と述べておられる。

また重友毅氏は「諸問題への真摯な探究は人間行動のあり方にも向けられ、そこにさびしい悔理的批判となつて示されている。(中略) 怪異はある時は誠実心の高揚の極として、またある時は不誠実心への手ひどい懲罰として出現せしめられるのであつて、読者はそこに恐怖感に似た、しかしそれとは別の深い感動に打たれざるを得ないのである。したがつてここに視点を据えれば、怪異はむしろ作者の倫理的批判を強調するための方便であつたと見ることもできるのである。」^(註三)と述べておられる。

ここで「雨月物語」の中に現われる怪異のあらわれをみてみると次のようになる。

篇名	怪異	性別	怪異のあらわれ	時代背景
白 峯	上皇	男	怨 靈	平安後期
菊花の約	赤穴	男	魂 魄	戦国時代
浅茅が宿	宮木	女	靈	室町中期
夢応の鯉魚	僧	男	変身(人→鯉)	平安中期
仏 法 僧	秀次	男	幽 靈	安土桃山代
吉備津の釜	磯良	女	怨 靈	室町中期
蛇性の姪	蛇	女	変身(蛇→人間)	
青 頭 巾	僧	男	変身(人→鬼)	室町後期
貧 福 論	金	男	変身(金→精霊)	安土桃山代

これを見ると、いろんな形の怪異のあらわれがあることがわかる。そしてこのうちで怪異小説としての面目を最も発揮しているのはやはり「白峯」「吉備津の釜」のような怨霊譚である。したがつ

て、単なる怪異小説とするならば、怪異の様相の強く現われている怨霊譚を多くとつた方が、怪異小説としてはより効果的であろうし、また読者(一般大衆をさす)の興味を引くためにも、その方がよいであろう。

しかし九篇中には怨霊譚はわずか二篇であつて、その他の篇をみわたす時、怪異の要素の極めて少ないものもある。

さらに怪異の描写に目を点すれば、怨霊譚は勿論のこと、他の篇においても、目を奪うだけの要素はある。これは重友毅氏も述べておられるように、作者の技巧に由来するものであろう。すなわち重友氏は「秋成の怪異描写は、決して単に彼の幻想の測りがたい「靈能」からおのづからに生れ来つたものではない。むしろそれよりも、そこに得来つたものを基に、いかにすれば読者を恐怖の底に引き込むべく最大の効果を挙げ得るかについて、周到綿密な知的判断が下されたところに成り立つたものであるといふことができるのである。(中略) それらの資料となり、典拠となつたものは、作者の知的判断によつて、適切に整理し、按排せられて、いはば寸分の隙もない構成の中に……(略)^(註三)と述べておられる。

事実、「雨月物語」は描写に中国の白話小説集、日本の古典の資料を駆使して、よりすぐれた物語の構成をなしている。その巻々には知識がふんだんに盛られている。

私は「雨月物語」の愛読者もまた、そのような知識を理解することができると所謂知識階級ではなかつたらうかと思える。「雨月物語」の再版も初版から十年ほど後の天明七年頃にだされておられ、再版後十余年にして三版も出されている点から、相当の知識階級から愛読されたのであろう。

これらの点からも、「雨月物語」がいわば興味本位につくられたものではなく、換言すれば、怪異小説としての存在以上のものを有しているとみてよいのではないだろうか。

秋成の作品をみると「雨月物語」以前に「諸道聴耳世間猿」「世間妾形氣」という西鶴の流れをくむ気質物、所謂八文字屋本と呼ばれるものを出版している。「雨月物語」の序によれば、「雨月物語」は明和五年三月に一応成立をみたわけであり、「世間妾形氣」が明和四年に成っているからして、丁度一年余で気質物から怪異小説への転換をなしたようになる。

その当時、古く「日本靈異記」「今昔物語集」にも求めることができるわが国における怪異文学に、中国からの怪奇白話小説「剪燈新話」の及ぼすところとなつて、殊に怪異文学や怪異談が流行していたようである。これらの怪異小説の中で、秋成の「雨月物語」という怪異小説に大きく影響あつたのは都賀庭鐘、別名、近路行者、と称した人の「英草子」それに続く「繁野話」と一般にいわれている。

この庭鐘の「英草子」「繁野話」、秋成の「雨月物語」も当時の怪異小説がそうであつたように、中国白話小説にその範を仰いでいることはいうまでもない。「剪燈新話」を中心とした一連の中囃白話小説である。

「江戸文学研究」の中で山口剛氏は秋成の「雨月物語」について、『さういふ怪異小説の間に於て、最も傑出し、また最も高い独立性を有するものは上田秋成の「雨月物語」である。怪異小説はここに至つて、その実を現はしたといふべきである。(中略)彼が翻案の上に立つて、更に翻案を重ねるがために、いよいよ「支那」を

遠ざかつて、「秋成」に迫る便宜がなる。「雨月物語」の光彩は一にここを基準として発する。単なる流行に動かされてなした「雨月」ではない。彼の全心全靈がこれを成し得たのである。』と述べておられる。

事実、秋成においてはそれをそのまま日本化したような部分もある。しかしそれらに中国的匂いが多分にあるにもかゝらず、秋成の筆になると、原話より一層秀れたものとなつている。原話を中国白話小説にとりながら、そこには燦然と秋成独自の世界が現わされていたのである。

それでは秋成独自の世界とはどういう世界を指すのであろうか。これについては秋成の特異な生い立ち、それに由来する性情、そして怪異小説流行の素因をなしたと思われる時代背景について述べなければならぬであろう。

まず秋成の生い立ちであるが、秋成は享保十九年(一七三四年)大阪曾根崎新地の妓屋に、所謂私生児として生れた。そしてまだ物心つかぬ四才の折に、大阪堂島永来町で手広く紙油商を営んでいた上田家の養子となつた。秋成自身、自像を収めた箱の蓋に「無腸生浪華、客于京師十六年、無父不知其故、四歳母亦捨、有倅上田氏所養」と記している。養家には秋成にとっては義理の姉にあたる実子がいたが、養父母とも秋成を大層かわいがつたことである。

ところが五才の折、重い痘瘡に罹り、悪性のもので一命が危ぶまれた。そこで養父母はその身を案じて歌島の稲荷に祈つて助命を請うた。さしもの病も全快するに至つたのであつたが、秋成はその病毒のために生れもつかぬ片輪となつてしまつた。「雨月物語」の序に、「剪枝喻人これをする」と署名あるのも、この病のために不

具となった指になぞらえていったものだと思われる。

大病した翌年、慈愛深かった養母を失い、後母がくることになったが、彼女もまた慈愛深い人で、秋成は養父母の慈愛の下にかなり我儘に育つたらしい。

重友毅氏は秋成の暗い出生と、性格とについて、『彼自身の出生に対する羞恥と苦悶とを解決するものではなかった。寧ろ養父母の恩を感じれば感ずるほど、そこに餘え難い距離を感じ、突き離された寂しさを感じる彼であつたらう。そしてそれは、これも生家にならなくなって、卑しい家業に甘んじてゐたなら、惑いはそれほどまで気にしなくて済んだかも知れない指の不具に対する引け目や苛立たしさと相結んで、彼をして次第に自棄と反抗の態度を取らしめるに至つたのであらう。』と述べておられる。

このような生い立ちの不幸が、若き日の秋成にとって、耐えがたい重荷となつたであらうし、それに対する引け目から、おのずと明るさよりも暗さに向う、内向的性格、閉鎖的な性格を形作つたのであらう。

またこの暗さは時代や社会の影響からもうかがわれる。

秋成が生をうけた江戸時代は一般に町人文化の華々しく咲いた時代だといわれている。しかし秋成が生きた享保の頃から、商業経済に基づいた町人文化の発展は行き詰まりをみせ、加えて、享保以来の大飢饉の波状的襲来は深刻な社会問題へとなつていった。

秋成は丁度このような、社会に重苦しい鬱屈気が漂っている時代に町人階級のもつとも勢いが強かつた上方に、町人として成長したのであつた。したがって、この時代的な暗さは「雨月物語」の上にも投影されているし、また、秋成が生をうけたこの近世中期になつ

て殊に、怪異小説の流行をみたのもこの時代的な暗さから納得できらるであらう。

堺光一氏は時代と怪異性の結びつきについて、「この重苦しさの中でなお何らかの救いと解放を人間は願望する。そして現実においてそれが求められないとなると自然、人間は現実の世界を超えた空想の世界にこれを求めようとする。かゝる空想の世界での自己の願望の充足は真に積極的でなくかつ不健康ではあるが観念的には重苦しい人間の虚無感を一時的にみたくしてくれるものである。このような消極的な要求によって、怪異譚は生れて来たものであらう。そこでは現実を満たし得ない人間性の解放が時間や空間を超えて達成される。そこではあらゆる社会的規範を無視して人間の自由な世界が展開する。』と述べておられる。

更に「解釈と鑑賞」の中でも辻森秀英氏は「宝暦元年に將軍吉宗が歿し、田沼意次時代が始まるうとしていることである。幕府政治の衰退は否定できないことであり、経済は行き詰つて、元祿時代のような希望に充ちた生氣を見出すことは出来ない。歩一歩、文化・文政時代の爛熟時代に近づきつつある。沈滞と頹廢との中にいて、而も何らかの救いと解放を人間は求める筈である。

現実の中に救いが求められない時、空想の世界にそれが求められるのではなからうか。而もこの時代は、積極的な希望の中にそれを求めることができないで、いじけた、頹廢的なものにしか求めることができない。』と述べておられる。

このように重苦しく抑えつけられた時代の鬱屈気、退魔的であり、威圧的であり、世俗的であつたからこそ、秋成独自の怪異小説をつくりあげることができたのであらう。

「雨月物語」をその物語の主人公の行動を通じてみられるところの信義の世界、反逆の世界、人間性本来の世界としてみる時に、人間秋成と、以上のような時代の様相がみられるであろう。

「雨月物語」の各篇に描きだされている時代が近世代にあるのではなく、すべて過去すなわち、中世代を根拠として描きだされている点からしても、中世代の方が、秋成の世界を描くのに適していたからだとも思われる。

時代世相の及ぼす影響は、秋成の処女作である「諸道聴耳世間猿」にまつわる逸話にも及んでいると思える。逸話とは享保二年（一八〇二年）九月六日の田宮仲宣から大田南畝宛の書簡（南畝著『一話一言』書収）に「一、世間狙之事、世上に存知候古老甚だ稀に成り、相分り不申候故、与斉に承り懸り候処、甚だ怒り、剩へ絶交に及び申候上、いろいろと非を莊り候。」との一文である。

どうして秋成がこの気質物の作者であることを否定しようとしたのであろうか、興味深い問題であるが、秋成はこの気質物の作者たることを余程後悔しているように推測される。秋成の若い時、かなりの放蕩者であったことから、その勢いでもって、気質物を書いたのであろう。が、そうすれば若い時の道楽を今さら思い出さたくない気持と、そのような世界を嫌悪する気持ちがあればたさかけていたのではないだろうか。気質物の世界は当代である。そこには前に挙げたような退廃的、世俗的なものが満ちあふれている。

「雨月物語」が暗く魂の反逆を描き、あるいは秋成の理想の世界を描いたのだとみる時、以上のような近世中期の時代世相によるものであると思われる。そして「雨月物語」を著わすことによって、秋成が嫌った社会、すなわち重苦しく、あまりにも低俗化した社会

に対して、自分自身を守り、あるいはひそかに自己を慰めていたのだと思われる。「雨月物語」のなかで秋成は現実の世界を超越して、幻界という世界をつくりあげた。その世界は現実社会に反逆しながらも求めた、秋成の理想の世界であり、また秋成が現状に甘んじきれずに、いたゞまれずに描いた地であって、いいかえれば安住の地をみいだすべくして描いた世界であった。

ともかくも、秋成の人となった時代世相、環境は秋成の人格精神形成に多大の影響を与え、更に「雨月物語」にそれは受け継がれていると思われる。次に「雨月物語」を通して秋成の性格ならびにその精神について考えてみることにしよう。

秋成の性格は「雨月物語」の諸篇の一応主人公と目される人物のそれぞれに投影されている。

先「菊花の約」では普段の秋成の姿をみる。性格的には温和であり、普通の人と比べたら異常とも思われるような純粋な人である。たゞ純粋な心ゆえに生一本なところもみられる。いわば純情にして、多感な心情の持ち主である。ところが、一步誤れば「白峯」の上皇においてみられるように融通のきかなさをさらしだす。心が健康であれば抱くまでもない妄執に自らを縛って、苦しむのである。

ここで、このことについて森山重雄氏の述べておられる、秋成の被害者意識という考えをもってきたら一層理解できると思える。

森山重雄氏は秋成の被害者意識と加害者意識として、「秋成には人間も動物も神も幽霊もみな同一であった。生あるものにとっては現世こそ幽界にはかならないとみたのであろう。現世という幽界にはいくたの加害者と、さらに多い被害者とが充満しており、たま

たまその矛盾の尖鋭にあらわれる場合があれば、それが歴史上であらうとまた現代のできごとであろうと、秋成はそこに物語結実の素材をみいだした。(中略)

ことに秋成は知識人が世の商業主義に感染し、玩物喪志の徒となりさがっているのを嫌悪し、これにはげしい批判のことばをなげつけるとともに、さげすみの眼で自己をこうした現実から峻拒しようとする。秋成のこの対社会への乖離は逆におのれが人生や社会から加害されているという宿命的な観念を育てていった。^(註六)と述べておられる。

この森山氏のいわれる被害者意識が、「白峯」の上皇を形成したものであろう。被害者意識は絶えず働き、加害者に対して、その意識は怨恨としてしか現わしえない。このような被害者意識がおのつと妄執へと誘ったのであろう。そしてその被害者意識のために、秋成は現実社会との接触において苦しんだのであろう。

私にはこの被害者意識が秋成の暗い生い立ち、指の不具に因を発しているように思える。秋成は本来、素直な人であったであろう。それが、私生児としての出生、指の不具など幼年時代の不幸が次第に純粹な心を蝕ばみはじめ、不幸なできごとに対するひげ目と共に、その被害者意識を募らせ、他への反逆へと向っていったのである。

いうならば、秋成の幼年時の不幸に対するコンプレックスが秋成本来の直き心にはたらきかけ、その性情の純粹ゆえに、秋成を苦しめ傷つけ、排他的な人間にしていたのであろう。

「雨月物語」が成ったのも秋成の満されない心からだと思われ。暗い生い立ちに劣等を感じ、そのやり場のない憤りにさらに退

廢的な社会、みにくい人間関係などと、秋成の化な精神をいためつける。そのようなたきのめされた心を反逆に転じて唯一の安息所を「雨月」の中にみいだそうとしたのであろう。

一般に秋成の性格といえば、偏狭執拗にして頑僻固陋なる性質とか、狷介な性格だといわれている。しかし狷介だという性格の底には秋成の悲しみを隠した強がりの虚勢があるように思われてならない。

ま と め

本論で、「雨月物語」の怪異性について、それと共に作者秋成について考えてきたけれども、終極的には、怪異は秋成の思想につながるものであると思える。当時がちやうど怪異小説の流行期にあたっていて、秋成もその流行に便乗したとしても、「雨月物語」は単なる怪異小説とは異っている。「雨月物語」の本質からみれば、怪異性は秋成の魂を現わす手段であり、いっそうそれを強調するものであった。

「雨月物語」は作者秋成の人となった重苦しく暗い時代に、俗化して、すっかり退廢化した秋成自身をも含む町人社会に反逆し、秋成本来の性情である「直き心」を現わす一過程での理想の世界を、悪くいうならば逃避の世界を描いたにすぎない。そして怪異性はそのような時代に、環境に押しひしがれて、深い傷を負った秋成の魂の叫びを現わすものであった。現実ではあらわせない秋成の心のわだかまりを、幽界に託して、その悲痛な魂の発露を試みたのである。その悲痛な魂のほとばしりを、解放を描くのもっとも有効な手段であったのが、当時流行の怪異であった。

この限りにおいては、怪異小説「兩月物語」は単なる怪談小説ではなく、封建時代に生をうけ、時代環境にとけこみきれなかった一人の人物の、孤高にしてみい出した理想の境地の、やがてはその境に到達せんとして、あえいでいるある過程のなかの一過程の現われとみてよいであろう。

註一、山口剛著「江戸文学の研究」

土屋文明の抒情

はじめに

土屋文明は周知の如くアララギ派の歌人であり、その主張するところは、いわゆる万葉調的な写実主義である。ところが、この写実主義は時に、抒情と相反するものと考えられたりする。が、それはまちがった認識である。抒情とは狭義の感情、即ち情緒だけを抒べることではなく、広義の感情の感じ、即ち直感、体感、経験、意識などを抒べることを意味しているのである。抒情、それは情緒の感傷的な静なる趣きの表出ではなく、あくまで「感情」を抒べることなのだ。

従って、文明氏の作品が短歌である限り、たとえそれが写実主義

註二、重友毅著「兩月物語の研究」

註三、前に同じ

註四、山口剛著「江戸文学研究」

註五、重友毅著「兩月物語の研究」

註六、堺光一著「上田秋成」

註七、解釈と鑑賞

註八、森山重雄著「封建庶民文学の研究」

川 江 純 子

といわれても、そこに抒情ということ否定することはできないのである。

そこでここでは、この文明氏の短歌の抒情の特色をみてゆきたい。

(一) 抒情の方法面における特色

アララギ派の大きな特色であると同時に、文明氏自身の歌風の特徴にならなっていることに「写実」ということがある。この「写実」とは文字どおり「実を写す」ことであり、それは何もアララギ派に限ったことではなく、浪漫派、更に文学全体についていえることではなからうか。そして、その主義主張によって「実」なるものが変わってくるのではあるまいか。アララギ派のいう「実」とは「対象」、